

『北槎聞略』における日付の構造その他

——大黒屋光太夫はいつ女帝エカテリーナ二世に謁したか

中 村 喜 和

はじめに

伊勢国若松村の大黒屋光太夫は江戸時代にアレウト諸島へ漂着し、さまざまな辛苦の末にはじめてロシアから帰国した人物として知られている。光太夫は神昌丸と呼ばれる千石船の船頭だった。この船には船頭をはじめ一七人が乗り組んでいた。神昌丸の難船と漂流の顛末、ならびにはぼ一〇年にわたるロシア国内各地における滞在や見聞を光太夫から聞き取って記述したものが『北槎聞略』である。

記録者の桂川甫周は將軍家の侍医であり、蘭学者としても一家を成していた。したがってオランダ語の文献などの知識を利用し、随所で光太夫の報告を補注の形でお

ぎなっている。たとえば「按るに、ゼラガラヒに云」ではじまる補足の文章がそれで、この場合ゼラガラヒとはヨハン・ヒューブナーが書いた世界地理の本 *Kurze Fragen aus der allen und neuen Geographie* (Leipzig, 1693) のオランダ語訳 *Algemeen geographie* (Amsterdam, 1722) であつた。

光太夫とその配下である小市と磯吉の三人は、ロシアの使節アダム・ラクスマンにもなわれて帰国した。世は鎖国時代であつたから、彼らの帰国が大きな驚きをもつて迎えられたことは言うまでもない。漂流そのものはむろんのこと、光太夫らの語るロシア事情にも非常な関心が寄せられた。したがって神昌丸の難船と漂流、光太夫や磯吉のロシアでの体験について（小市は日本側に引

き渡されるまえに死亡していた) 実におびただしい記録が編まれた。その中には本人からの直接の聞き書きもあれば、かなり形のくずれた伝聞や風聞もある。一部は近代になって刊行されたが、手書きの写本のまま伝わっているものが少なくない。まだ広く世に知られずに眠っている資料が存在する可能性もある。⁽²⁾

とはいえ、あらゆる著述の中で記事の内容について最も信用のおけるのが『北榎聞略』であることに疑問の余地があるまい。第一にそれは「内旨」つまり將軍の直々の命をうけて編纂された公の、かつ最も詳細な報告書であった。第二に光太夫らが帰国し、江戸に到着してからあまり間をおかずに聴取と執筆が行なわれたことが挙げられる。光太夫の異国での生活の記憶はまだかなり鮮明であったにちがいない。第三の理由は著者桂川甫周の見識に信頼が寄せられることである。海外の文物に深い知識と憧憬をいだく蘭学者として、甫周はごく微細な点にいたるまで光太夫に事実を問いただし、これを正確に記述しようとしている。

小論の目的はこの『北榎聞略』の中で言及されている日付について若干の考証を試みることである。

光太夫は江戸時代後期の町人学者狩谷椋斎の同時代人であった。光太夫がわずかに四歳ほど年長である。百姓という身分ながら光太夫はなかなかの学問好きであり、帰国してから生まれた息子の大黒梅陰は市井の儒者として名を成したほどであるから、光太夫も書誌学・金石学の権威で考証学を大成したとされる椋斎の名前くらいは耳にしていたにちがいない。この拙論を名著『狩谷椋斎』の著者にささげるいささかの機縁はみとめていただけると思う。

三種類の暦

『北榎聞略』には日付に関して三種類の暦が用いられている。江戸時代の日本で用いられていた和暦、一九一八年までロシアで使われていたユリウス暦、ならびに当時すでにヨーロッパで普及していたグレゴリオ暦である。

なぜグレゴリオ暦があらわれるかといえば、甫周が光太夫にロシアの墓のつくり方をたずねたついでに、長崎悟真寺に立つオランダ商館長ヘンドリック・ゴトフリード・デュールコープの墓碑に言及しているからである。

一七三七年三月五日生まれ、一七七七年七月二七日没と

(3) 『北槎聞略』における日付の構造その他

いう日付は、グレゴリオ暦の**はずである**⁽³⁾。それからもう一箇所、甫周は例の「ゼラガラヒに云」として、光太夫が謁した女帝エカテリーナ二世と皇太子ピョートルとの結婚の日付を一七四五年九月一日と記述している。ドイツの王女が結婚してロシアの皇太子妃となったのである。グレゴリオ暦で日付が示されるのはこの三回だけである。

これ以外に日付を示すのに用いられる暦は和暦が三五回、ユリウス暦が六一回である。桂川甫周と大黒屋光太夫はもちろん和暦とユリウス暦のあいだに食い違いがあることに気づいてはいたが、ユリウス暦とグレゴリオ暦の区別は意識していなかったようである。

神昌丸が伊勢の白子港を出帆したのは寅年天明二年二月一三日のことである。これは西暦では一七八三年の一月半ばにあたっていた。極月であるから、神昌丸は翌天明三年卯年の暦を積んでいたはずである。それはおそらく、今も神宮暦の名で親しまれている伊勢暦であったかもしれない。

したがって、白子を出港してから七カ月あまりたった天明三年七月二〇日に島影を発見、その日のうちにアレウト諸島中のアムチトカに流れ着いたということをはじめ

め、この年の出来ごとはずべて和暦で記録されているのである。

その翌年からの日付はロシア暦によらざるを得なかった。日本を出てから約一〇年後、アダム・ラクスマンや光太夫らをのせたロシア船エカテリーナ号が東蝦夷地の沖合に姿を見せるのは子年寛政四年九月三日である。それはロシアの暦ではほぼ一月早くて一七九二年一〇月七日にあたっていた。それからの日付はふたたび和暦に戻ることになる。光太夫らが寛政五年八月江戸に着いた直後にうけた審問を篠本廉が筆録した『北槎聞略』はこの間の事情を「甲辰の後是日（ロシア船が根室沖に到着した日——中村）までは彼国の暦を以て記す」と明記している⁽⁴⁾。

ロシア暦にしたがうといっても、さすがに年まではキリスト誕生を基準にして一七××年と数えたわけではなく、甲辰あるいは丁未というように十干十二支を用いている。年号の改元を知ることが不可能である以上、これはきわめて合理的な方法であった。ちなみに光太夫がアダムの父親キリール・ラクスマンとペテルブルグに上京する一七九一年は辛亥、蝦夷に帰着する一七九二年は壬

子ということになる。

克明な日付の記録

神昌丸一七人の乗組員のうち帰国できたのは光太夫を含めて三人だけである。ほかに二人がイルクーツクに残留した。兩人ともロシア正教会の洗礼を受けていたために、祖国へ戻ることをあきらめたのである。その他の二人はいずれも帰国の許可が出るまでに病死していた。

最初に亡くなったのは「水手」の幾久で、アムチトカ島に漂着する五日前の神昌丸船中であった。ようやく島に上陸してからの年のうちに「船親父」の三五郎をはじめ六人が相ついで世を去った。漂流中の疲労と生活の激変が原因であろう。その翌年に、アムチトカ島で一人が落命した。それから四年後にカムチャトカ半島へわたって三人が命を落としたのは越冬中の飢餓による壊血病が原因である。最後にイルクーツクに着いてから「水手」の九右衛門が病気で亡くなった。

幾久にはじまって九右衛門にいたるまで、光太夫は配下の死没を述べるときその年月日のみならず、絶命の時刻まで明らかにしている。当然のことながら、最初の七

人の忌日は和暦による日付、つづく五人の場合はロシア暦による日付である。アムチトカは絶海の孤島であったとはいえ、海獣の毛皮を採るために少グループのロシア人が駐在しており、彼らが暦を所持していたのである。

たとえば幾久は卯年「七月一五日の夜亥の刻ばかり」、九右衛門は亥年「正月一三日丑の刻ばかり」に死亡したという。このように刻限まで言及していることは、光太夫が仲間の死を特別に重要視したことを示す以外の何ものでもない。彼はおそらくすべての故人の臨終に立ち合ったことであろう。

それと同時に、このことは光太夫が漂流中とロシア滞在中に日記のような形の記録をつけていたことを推定させる。事実、彼は同胞を失った日付のみならず、アムチトカ島脱出からカムチャトカ東岸にわたり、さらにカムチャトカ西岸からオホーツク、ヤクーツクを経てイルクーツクにいたるまで、もれなく出発と到着の日付を甫周に告げている。イルクーツクから首都ペテルブルグへの往復の旅についても同様である。何月何日ごろ、あるいは何日前後というようなぼかした表現はない。

ことは日付ばかりではなかった。自分たちの生活の全

般について、ロシアの国政やロシア人の風俗習慣について光太夫の知識と観察は多岐にわたり、微をうがっている。彼がもたらしたロシア語の語彙はほぼ一五〇〇語に及んでいる。

これらはいずれも単なる記憶にもとづく報告とは考えられない。光太夫は綿密に記録をとる習癖を身につけていたにちがいないのである。

日付の非整合性

それにもかかわらず、現在刊本として出まわっている『北槎聞略』を子細に検討すれば、日付の記述に若干の食いちがいがみとめられる。念のためにそれらを列挙してみよう。カッコ内のアラビア数字は岩波文庫版のページ数である。

水手長次郎の死 卯年（二七八三）二月二〇日（卷之一18）、同年二月一七日（卷之二35）。後者はおそらく別の水手清七の死亡の日付との混同。

ヤクーツクからイルクーツクへの到着 酉年（二七八九）二月七日（卷之二45）、同年二月一七日（卷之三68）『北槎異聞』に二月七日とある。後者は筆写生の誤りか。

イルクーツクよりペテルブルグへの到着 亥年（一七九二）二月一九日（卷之三50）、同年二月二九日（やはり卷之三69）。『北槎異聞』に二月一九日とある。この年は閏年でもなかったもので、二月二九日はありえない日付。後者は筆写生の誤りであろう。

ペテルブルグよりイルクーツクへの到着 子年（一七九二）一月二三日（卷之三64）、同年一月三日（同じく卷之三69）。『北槎異聞』は一月三日とする。しかし旅の距離を考えれば一月三日でなければならぬ。後者は誤記にちがいない。

イルクーツクよりヤクーツクへの到着 子年（一七九二）六月一五日（卷之三64）、同年六月一九日（同じく卷之三69）。前後の記述からして、おそらく後者は筆写者の誤り。

これらは同一であるべき日付が反復されるさいの誤りで、どの場合も二度目の言及がまちがっている点で共通している。おそらく原稿を整理するさいに何らかの手違いが生じたのであろう。

これとかなり趣きを異にしているのが、光太夫がロシア帝国の首都へのぼり女帝エカテリーナ二世に拝謁した

日付である。光太夫はこの拝謁が帰国の許しを得るために重要な意義をもつことを認識していた。したがって、『北様聞略』はこの日のことに大きなスペースをさいている。以下にその本文の要旨を引用する。

同(一七九一年——中村)五月二八日……漂人光太夫を召連参るべき旨あるよしをキリロ(キリール・ラクスマン——中村)に達す。……光太夫は天にも升る心地して即刻キリロに伴ひて出る。其日は白灰色の哆囉呢しやにてフランツースといへる製の服を着たり……

扱も別墅の王殿は五層に造り磚しまいしはムラムラといふ石を磨て砌成す。下の一層は内臣、侍医の直舎ちよなり。……ベスポロッコ、ウヲロンツァーフフ兩人(前者は外務次官、後者は商務大臣——中村)下層に出迎ひ、光太夫を御前に召さるゝ間こなたへ来るべしとて先に立て、第三層に伴ひ行、キリロも後に続て出る。……女王の左右には侍女五、六十人花を飾りて囲繞す……。

このあと光太夫はエカテリーナの右手に接吻して拝謁の礼を無事にすませ、女帝は光太夫の帰国の請願書を読

んで、その意志を確認するのである。ついでに光太夫はこの日が皇太孫アレクサンドル・バヴロヴィチの誕生日だったとも述べている。

光太夫がエカテリーナ二世に拝謁をたまわった日が五月二八日ということに異議を唱えたのはロシアの研究者ウラジーミル・コンスタンチーノフ博士である。博士は初期の日露交渉史の専門家であり、『北様聞略』のロシア語への翻訳者でもあった。博士はその翻訳にほどこした詳細な注釈の中で次のように述べるのである。⁽⁵⁾

五月二八日は筆写者あるいは光太夫の誤り。エカテリーナ二世が光太夫を引見したのは六月二八日である。一七九一年の『宮中儀典日誌』の記事によると、皇太子パーヴェルの名の日の祝いと、女帝自身の即位記念をかねて、六月二八日と二九日にペテルゴフ宮殿で盛大な宴会がもようされた。皇太孫アレクサンドルの誕生日であるというのは光太夫のまちがいである。

ロシア暦の六月二九日は正教会の「ペトロとパウロの日」で、たしかにエカテリーナの後をおそってロシア皇

帝となるパーヴェルの「名の日」(本人と同名の聖者の記念日——ロシアでは誕生日より「名の日」を重視した)であった。それは同時に、この日は夫である皇帝ピョートル三世を退けてエカテリーナ自身が即位した日から二九年目の記念日、さらにロシア入りしたばかりのドイツ公女ゾフィー(のちの女帝)がピョートルと婚約式を挙げた日からは四七年目の記念日にもあたっていたのである。

コンスタンチノフ博士が依拠している『宮中儀典日誌』を私はまだ読んでいない。博士はその資料を実際に検討しての断定であるから、相当に根拠のある説と認めなければならない。

博士によれば、光太夫は三重のまちがいをおかしていることになる。第一は日付で一カ月のずれ、第二は謁見の行なわれた場所がツァールスコエ・セローではなくて、やはりペテルブルグの郊外のペテルゴフ宮殿であったこと、そして第三はその日が皇太孫の誕生日ではなく皇太子の「名の日」だったこと。第二と第三はしばらくおくこととし、ここでは第一の日付のずれだけを問題にしよう。

光太夫はエカテリーナ二世にはじめて謁した日をなぜ一カ月早めて書いたのであろうか。

暦のずれ

光太夫が女帝拜謁の日付を一カ月早めているのは単なる記憶ちがいがい、あるいは筆録者の誤記ではなくて、意図的にずらしたのではないか——これが筆者の推論である。以下にその理由を述べる。

『北椋聞略』巻之八はロシアにおける年中行事と飲食物についての記述である。光太夫はペテルブルグにおいて例年もおおされる行事として次のものを挙げている。番号は便宜上筆者が付したもの。

- ①正月一二日 エカテリーナ二世の誕生日
- ②正月一九日 エカテリーナ二世の「名の日」
- ③二月 水の祭
- ④二月 ペテルゴフにて聖イワンの祭
- ⑤三月の末か四月の初め キリストの祭(復活祭)。
それに先立って四十九日間の大齋期

⑥四月 聖ニコライの祭

⑦七月三日 ペテルゴフにおいてピョートル一世の誕

生の祭

- ⑧七月 アレクサンドル・ネフスキ修道院にて法会
 ⑨一二月二四日 「エネラル・ヘルトマルシャル」(元帥)宅での祭(クリスマス・イヴ)。この日より年内は新年の祭

このリストには不審な点がいくつもある。まず年のはじめから七月までは行事が多いのに、八月以降は空白がつづき、わずかにクリスマスだけが挙げられている。エカテリーナ二世の誕生日が一月になって、四月二日生まれなのがいけない。彼女はユリウス暦で四月二日生まれなのである。正月に誕生祝賀や「名の日」の祝いをするはずがない。二月の水祭りというのは、ふつう正月六日の主顕節に行なわれる水清めの儀式のことであろう。この二月に聖者イワン(ヨハネあるいはヨハネス)の祭りがあるというのも解しかねる。ロシア人にとってヨハネの日は、六月の夏至祭りのことだからである。

実は、光太夫がベテルブルグに滞在したのは、一七九一年二月一九日から同年一月二六日までである。したがって光太夫は、正月の女帝の誕生と「名の日」の祝いや二月の水祭りの盛儀をかなり詳しく記述しているにも

かわらず、自分の目で見ただけではない。だれかに話を聞いて、ノートに書きとめておいたのであろう。クリスマスについても同様である。実際に立会う機会があったのは、右のリストの⑤から⑧までである。

ロシア正教会の暦によると、一七九一年の復活祭は四月一三日であった。復活祭は周知のように、年によって移動する祝日なのである。光太夫はそのことは正しく認識していたことがわかる。⑦のピョートル大帝の誕生日七月三日はまたしても誤っている。ピョートルは一六七二年五月三〇日の生まれだからである。概して『北槎聞略』で言及されるロシアの皇族の誕生日は例外なく正確さを欠いている。

問題は⑥と⑧である。⑥の聖ニコライの祭りはクリスマスサンタクロースとして親しまれている聖者ニコラスにちなむ日である。ニコラスは四世紀の人、小アジアのミュラの主教だった。東方キリスト教会では九世紀から、カトリック教会では十一世紀から、ニコラスはキリスト教徒によって最も尊崇される聖者となった。一二月六日が命日で、ロシアでは冬のニコライの日とされる。一〇八七年にイタリアの商人たちがニコラスの

聖骨を盗み出してバりに持ち帰った日が五月九日であり、ロシアではこれが春のニコライの日として盛んに祝われる。光太夫はこの春のニコライの祝日に言及しているのである。

⑧のアレクサンドル・ネフスキイ修道院の法会というのは毎年八月三〇日に行なわれる修道院の開基記念日をさしている。アレクサンドルは十三世紀の武将で、ネフ河畔でスウェーデン軍を破って「ネフの勝利者」を意味するネフスキイの異名を得た。二年後チュード湖における氷上の戦いではドイツ騎士団を撃破してさらに勇名をとどろかせた。ピョートル一世がネフの河口にヨールッパへの窓としてロシアの新都ペテルブルグを建設したとき、この町の守護聖者としてアレクサンドルの名をもつ修道院を創建することに決めたのだった。アレクサンドルの埋葬されていたウラジミールの町から公の聖骨を遷移したのが一七二四年の八月三〇日だったのである。

⑥と⑧に共通しているのは、光太夫の示している時期が実際の日付より一ヵ月ずつ繰り上げられていることである。このようなずれは、おそらくロシアのユリウス暦と和暦のくいちがいを考慮に入れて、光太夫が意識的に

操作した結果として生じたものではないだろうか。光太夫らがアダム・ラクスマンにとまなわれて根室に到着した一七九二年一〇月九日は和暦では寛政四年九月五日にあたっていた。光太夫も甫周も、日本とロシアにおける暦の体系が根本的に異なっていることをよく心得ていた。そのことは『北榎聞略』の記述から明白にうかがわれるが、両者を比べれば和暦がロシア暦より「およそ一月」ずれていると考えていたにちがいない。そのように受けとれば、女帝拝謁の日を光太夫が六月二八日とせず五月二八日とした理由が理解できるのである。

恋歌の翻訳の場合

光太夫が故意にずらしたのは日付ばかりではなかった。『北榎聞略』巻之九は主としてロシアの器物について紹介しているが、その巻末に「雑載」の章があり、ここでは男色や不義・離婚などの問題などを扱っている。この章の終りに近く、光太夫がロシアで聞いた俗謡が掲げられている。カタカナ書きであるが、二節あるうち第一節だけをここではロシア語テキストとともに引用しよう。ロシア語テキストは筆者が添えたのである。⁽⁸⁾

アハ スクシノ メニヤ Ах, скучно мне

ナツゾイ ストロネ На чужой стороне

フセネミロ Все немилго

フセツポステロ Все постыгло

ドルガメロワネット(繰返し) Дурга милого нет...

光太夫はこの歌が彼のためにつくられたと述べている。

ツァールスコエ・セローの御苑長がキリール・ラクスマンの友人のプーシュなる植物学者で、プーシュの妹のソフィアという女性が光太夫に同情しその身の上を「歌につくりてうたいはやらかし」というのである。事実は、この歌とほとんど同一の内容の歌が一七九〇年にペテルブルグで刊行された歌謡集に収められており、まさに光太夫が上京したころ都の巷で大いに流行していたものらしい。

成立の事情はどうであれ、肝心なのは光太夫がこの歌に与えた訳詞である。『北様聞略』には次のような逐語訳が与えられている。

ああ たいくつや

我他(ひと)の国

皆々たのむ

みなみなすてまいぞ

なさけないぞやおまえがた(繰返し)

これはおそらく詩的言語としてのロシア語作品の最初の邦訳である。これが誤りというわけではないが、現代の翻訳家なら、多分こんなふうに訳すところである。

あな さびし

異郷の空で

胸ふさぎ

心はしずむ

いとしの君なく(繰返し)

原詩の「ドルガメロワ」が恋人を意味するロシア語なのである。

光太夫はこの言葉を知っていた。ロシア語の語彙を集めた『北様聞略』巻之十一には「ドローク 相識」とあるし、やはり光太夫のもたらしたロシア語の単語をいろは順の和露・露和の辞書に編集した『魯西亞弁語』には「ドロク」に対して「馴染 近付の事」という語義が与えられているからである。

光太夫は『北様聞略』が將軍に提出される公式の文書であることを考慮して、言葉が卑猥にながれることをは

ばかったのである。桂川甫周は蘭学者であると同時に当時の「大通」の一人にかぞえられる粹人ではあったけれども、『北槎聞略』編纂の原則として「其意もと文詞を弄して徒に耳目の快に供する」ことを自らに禁じていた。それが江戸時代の知識人のたしなみというものであったにちがいない。

(1) 亀井高孝校訂『北槎聞略』岩波文庫版(一九九〇年)につけられた高野明の注による。四〇五頁。

(2) ここ数年のあいだに、光太夫に関する新しい研究の発表や新発見の資料の紹介が相次いでいる。最も注目すべきものとして木崎良平『漂流民とロシア』(中公新書、一九九一)、同『光太夫とラスクマン』(刀水書房、一九九二)。また酒井憲一「光太夫談話の伴信友筆記」『東洋文庫書報』第二三号、一九九二、のほか、ナウカ書店発行の『窓』誌に連続して次のような論文が発表された。林基「大黒屋光太夫研究稿」『窓』第七七、七八〇号、一九九一〜一九九二、岩井憲幸「伊勢若松縁芳寺蔵 大黒屋光太夫遺物「箴言」について」『窓』第七八号、一九九一、仲見秀雄「大黒屋光太夫帰国二百周年展に寄せて」『窓』第八四号、一九九三、伊藤恵子「アッシュ・コレクションの背景——光太夫の記録を残した人々——」『窓』第八五、八六号、一九九三、山下恒夫「大黒屋光太夫調査ノート」『窓』第八六、八八号、一九九三〜一九九四。

このほかにも、木村崇「比較文化論的光太夫論の試み」『むらぎ』第二号、一九九三、生田美智子「異文化の翻訳と記述——『北槎聞略』より」『むらぎ』第一三号、一九九四、のような論文が発表された。

さらに、山下恒夫再編『石井研堂コレクション』江戸漂流記総集第三巻に光太夫関係の資料が一括して収められ(日本評論社、一九九二)、宮本孝による現代語訳『北槎聞略』(雄松堂、一九八八)の刊行もあった。筆者未見であるが、『叢書江戸文庫』漂流奇譚集成(国書刊行会、一九九〇)、杉本つとむ編著『北槎聞略——影印・解題・索引——』(早稲田大学出版部、一九九三)もあらわれた。光太夫の帰国二百年にちなんで井上靖の小説にもとづく映画が製作されたことは特筆に価するが、光太夫の出身地である鈴鹿市では一九九三年一月に「大黒屋光太夫帰国二百周年記念展」が開催され、大黒屋光太夫顕彰会の編集で『あけぼの——大黒屋光太夫写真資料集』(一九九三)、都築正則「里帰りした光太夫の手紙」(一九九三)などが刊行された。これ以外にも管見にはいらなかった論文や著作がたくさんあるにちがいない。

(3) 前掲『北槎聞略』四四四頁によるとこの日付は誤りであるという。ただし、グレゴリオ暦であることは動かない。

(4) 大友喜作編『北槎聞略』他、一九四四、一一一頁。

(5) В. М. Константинов (пер. и ком.), Куцуряева Хосю Крапкие вести о скитаниях в северных водах. М., 1978, стр. 343.

(6) 『北槎聞略』はかりでなく、光太夫は『魯西亜文字集』にも女帝エカテリーナ二世、皇太子パーヴェル、皇太子妃マリア、皇太孫アレクサンドルとコンスタンチンの誕生日を記しているが、なぜかそれらはすべて誤っている。参照 木崎良平編 *The Genealogical Tables of Russian History*, 1993.

(7) これらの日付については木崎良平『光太夫とラクスマン 幕末日露交渉史の側面』、刀水書房、一九九二に多くを負っている。

(8) このロシア語歌詞については、コンスタンチーノフ博士の研究に依拠している。参照、中村喜和「あるロシア歌謡の歴史——いわゆる『ソフィアの歌』について」『言語文化』、第三号、一九六六年。

(9) 亀井高孝、村山七郎、中村喜和編『魯西亜弁語』、近藤出版社、一九七二、二八五頁。

つけたし

脱稿後、天理大学のイワン・ペトロヴィチ・ボンダレンコ教授からロシア語で書かれた次の二点の論文の惠贈を

うけた。Русско-японский словарь Дайкокуя Колаю как объект лингводидактического анализа/по Материалам книги Кауратавы Хосю "Уроки Бунарякы" (言語教授上の分析対象としての大黒屋光太夫の露和辞典/桂川甫周『北槎聞略』の資料にめぐって) 『天理大学学報』一七五輯、一九九四年、ならびに Заниди Дайкокуя Колаю русский язык? (大黒屋光太夫はロシア語を知っていたか) *Acta Slavica Iaponica*, Tomus XII (北大スラブ研究センター、札幌、一九九四)。なお仄聞するところによれば、同氏は近々ナウカ社の『恋』誌第八九号に光太夫の習得したロシア語の知識の文法的特質についてのエッセーを日本語で発表される由。(一九九四・七・三)

(一橋大学教授)